

しあわせは人の心の中に

高橋 寛

連休を利用して夫婦ではじめて上海へ行った。そこに住んでもう4年になる息子のところへ行つたのだった。現地の大学で3年生の息子の案内で大抵のところをまわった。

私たちは行く前から中国人にあまり好感を持っておらず、むしろ警戒もしていた。

ホテルに着いた途端からの喧騒。予約したホテルには最初から悩まされた。「これはちよつとハズレだね」息子がニヤニヤしながら言った。ロビー中に人の山。支配人だかボーイだか、一度まじまじ睨まれただけで、挨拶も頷きもしない。4泊の間出入り口に朝から晩まで立って、声を発するのがもつたいたないかのようにただ出入りする客を睨んでいるだけだった。客の方もそんなことお構いなしに喧騒も甚だしい。喧嘩してるのかと思うような高い声。慣れるまでは時々ハラハラした。

喧騒の大都市上海。地下鉄に乗っても人々は顔を突き合わせて大声で話している。その車内のうるささに圧倒された。それは食堂なども同様だった。買い物時には、店の番人はお愛想を一切しない。お金でつながる人々と言われる。買ってくれる人にしか興味がない。客がそばにいても、いらっしやいませ一つ言わない。とてもはつきりしている。

バスはバンバン走った。中にいる車掌のおばさんは、客を見て運賃を決めているらしい。機嫌の悪い運転手のバスに乗ったときには、乗るとき「早く乗れ。」と叱られ、バスはクラクションを鳴

らしっぱなしで乗用車を蹴散らして走った。私たち乗客は手すりにつかまっておとなしくじっとしていた。今の時代に、こんなバスもあるのだ。

一方、私たちの日本では電車に乗るとあちこちでケータイをじっと見つめる姿が日常の光景である。皆静かにケータイと話して自分の世界にいる。気配り、口配り、声配りが大切な作法のように。しかし、ファミレスの光景には、その理由はきかない。家族連れの楽しいはずの外食時間。子ども一人はマンガに顔を埋め、一人はケータイの画面と無言の会話をしている。寂しい顔の両親。そのうち親もそれぞれのケータイを取りだす……。日本のバスが、上海のようなことをしたら大変なことになるにちがいない。上海で不思議だったのは、口うるさいはずの中国人が運転手に文句を言わないことだった。そこに文化の違いとともに、それぞれの領域の「自分の仕事」を感じた。

3泊もしてホテル界隈の喧騒にもだいぶ慣れてきたとき、朝食後の午前、ホテルの周辺を家内と少しゆっくり散歩をした。

フロントマンもドアマンも相変わらずただ立って睨むだけ。こちらにも慣れたので、チラッと睨んで、外に出た。街路の両側は、早朝からの小さな出店がいくつも並ぶ。道路のゴミを掃く仕事の人があちこちにいる。ダンボールを積むリヤカーを自転車に付けて通ってゆく。自転車やミニバイクの二人乗りが多い。見ると、リヤカーの自転車もミニバイクも、中年以上の夫婦が多かった。夫婦のゴミやさんも多かった。そして大抵後ろに乗っている夫か妻は終始ニコニコしていた。タイツにミニスカで太った奥さんがさっそうとバイクを飛ばし、後には夫が必死にしがみついているのにも

出会った。

「みんな、しあわせそうね。」

家内がそれらを見ながら笑って言った。むろん嫌みではない。

自分の幸福に一番興味があり、そのために人は懸命に働く。他人の仕事や他人の贅沢に関心はない。

私たち日本人は今ブータンの「幸福度」に大変興味があるようだ。頼まれもしないのに、ブータンの「しあわせ」が本物かどうかさかんに検証し、今後の見通しまで立ててあげる。税金の使い方次第だという議論と一緒に。日本人と、ブータンの人々と、ときに中国人と比較しながら。

しあわせは、人の心の中にある。外の条件も周囲の環境も大きいことではない。日本人がブータンについて詮議するまでもない。ブータンのことはブータンが決める。ブータンの幸福はブータン人が考える。施策がたとえ失敗しても、ブータンの人々は失望せずに前進するだろう。

上海からの帰りの飛行機の中で、家内が言った。

「中国は好きでないこともあるけど、中国人は好きになったわね。」

私も同感だった。